

きこえの教室の先生へのメッセージ



伊藤 ホサナ

【きこえの教室について】

私は今年で26歳になり、きこえの教室を卒業したのは、今から15年前となります。時間が経つのが早くて自分でも驚いています。私は、きこえの教室に通っていたこと自体は覚えているものの、どんな出来事があったかはあんまり覚えていません。なので、母に会って話を聞いたり、きこえの教室の先生と母の間での連絡帳を読んだりしてみました。その中から、いくつかエピソードをピックアップします。

【エピソード①きこえの教室の先生】

きこえの教室では入学から卒業までの6年間通っていて、その間ずっとお世話になっていた先生がいました。その先生のどんなことも受容する姿勢、保護者を受け止める姿勢に支えられた、と母は話していました。私が勉強についていくのが大変で、親もそんな私をみて、イライラしていたのを先生にぶつけていたそうです。でも先生はすべて受け止めて、一緒に考えてくれました。特に、母の話の中で印象に残っていることがあります。入学後2～3日で私が「学校へ行きたくない」と言ってきた時の対応です。先生はすぐにクラスに行き、一年生のクラスメイトに「きこえないってどういうこと？」を話してくれました。それ以来もずっとフォローしていただきました。

【きこえの教室まとめ】

ろう者が通常学校でがんばることは、とても大変なことです。親としては、きこえの教室で子どもの勉強を見てほしいと思うかもしれませんが、子どもにとってのきこえの教室は、勉強する場だけではなく、オアシスでもあります。なんでも言えて、なんでも受け入れてもらえる。きこえの教室には、息抜きできる場所、休む場所という役割があると思います。それは子どもだけでなく、親にとってもです。ほかにも、子どもと通常学級の先生、保護者の関係がうまくいくように、繋いでくれる役割があると思います。



【手話の重要性について】

私の周りには手話が分かる人が少なかったこともあり、どちらかというと言語より口話を使うことが多かったです。これは私の意見ですが、口話だけだと相手のことを想像したり、思いやったりする力が育ちにくく、社会に出たとき致命傷になる気がします。

私は口話中心で育ってきたせいも、今の職場でも取引先と交渉するとき、交渉下手で悩んでいます。相手が何を言いたいのか、何を求めているのか分かりにくい時があります。例えば、カフェで働いている時に、お客様から「前のあのメニューはないんですか？」と聞かれたとき、「申し訳ありませんが、ありません。」と単に答えるのではなく、「限定のものでもう終売しておりますが、似ているメニューならございます。こちらです。」というようなプラスの接客方法など。

これは自分の経験不足が原因かもしれませんが、私にはそれだけではないように思います。小さいうちから、周りで、こんなことがあったとか、誰がどんな失敗したとか、こういう会話があったとか、常に情報が入っていれば、自分も気をつけようとか、明日はこうしたらいいとか考えることができると思います。口話だけでは、必要最低限の情報ばかりしか入ってこないもので、どうしても難しいと思います。しかし、先生や周りの大人たちが手話を使うことで、子どもたちにも常に多くの情報が入ります。口話では情報が少ししか入らず、何が分からないのかも分からない状態とでは、天と地の差があります。先生の方々には、手話をぜひ覚えて欲しいです。

